

International A + JP Conference SIM July 2024
Reflection – Poverty

志願者と有期誓願者の国際的 SIM 会議 2024 年 7 月

反省 – 貧困

「すべての善を全能の至高なる神である主に委ね、すべての善は主のものであることを認め、すべての善が主から来るので主に感謝しましょう。

.. すべての善は主に属し、主だけが善である。」

フランシスコ、最初の会則、17.17-18。

「ああ、聖なる貧困よ、神はあなたを所有し、あなたを望む人々に天国を約束します！
ああ、神を中心とした貧困よ、主イエス・キリストは、... 天と地を支配し、.. すべてを創造し、何よりもまずそれを受け入れました！...

これほど偉大で善良な主が、聖母マリアの胎内に入られたとき、この世で軽蔑され、困窮し、貧しい者として現れることを選んだのなら、極貧で、欠乏し、天国の栄養を絶対に必要とする人々が、天国を手に入れることによって主のもとで豊かになれるようにと、大いに喜び、喜ぶべきです！

... この世のものを永遠のもののために捨て、地上の善のために天国のものを選ぶとは、なんと偉大で称賛に値する交換なのでしょう！」

クララ、プラハのアグネスへの第一の手紙、16、17、19-21、30。

フランシスコ会の貧困観について議論するために、この2つの引用文を選びました。なぜなら、その観点は、私たちのほとんどが「今ここ」の世界で日常生活で経験するものとは対照的だからです。フランシスコ会の貧困は、福音書で語られているのと同じ貧困であり、私たちに別の世界、つまり約束された神の王国の「新しい創造」を開きます。聖書の「世界」の意味を注意深く見ると、その言葉が非常に多義的であることが

わかります。神が御言葉を通して創造した世界には、私たちの素晴らしく無限の自然宇宙だけでなく、神が肉となった御言葉の中で私たちの一人となるほど愛した人間も含まれています。この世界は、神の創造の手から生まれ、まさにこの瞬間に生まれています。神はそれを「非常に良い」と宣言しました。これが、フランシスコが感謝と賛美を捧げる世界です。聖ボナヴェントウラは、フランシスコの観点を叙情的に称賛しています。「彼の創造に対する態度は、鳩の視線のように単純で直接的でした。ボナヴェントウラは宇宙を純粹で靈的な視点で考察し、すべての創造物をすべての創造主に帰した。すべてのものに神を見出し、すべての創造物の中に神を愛し、讃えた。神の寛大さと善良さにより、彼はすべてのものに神を、すべてのものを神に宿した。すべてのものは同じ源から来ているという認識から、彼はすべての創造物を、たとえ取るに足りないものであっても、自分と同じ起源を持つものとして兄弟姉妹と呼んだ。」(『小伝説』)

しかし、ボナヴェントウラが述べているこの神秘的な神の顕現は、フランシスコが人生の終わりに、長く苦しい闘いの末に初めて達成したことを認識することが重要です。なぜなら、この本来善であった創造物は、歴史を通じて人類によって別の意味での「世界」に形作られてきたからです。それは、神の本来の神聖な計画に従って正義と愛の共同体としてではなく、サタンの王国に従って、貪欲、利己的な快樂と権力、憎しみと暴力の破壊的な体制として形作られた世界です。この世界は、私たちが毎日新聞を手にとったり、インターネットを開いたりするときに直面する世界です。これは、聖ヨハネが警告している「世界」です。「世も世のものも愛してはいけません。世を愛する者のうちに父の愛はありません。なぜなら、世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、富

への誇りなどは、父から出たものではなく、世から出たものだからです。そして、世とその欲は過ぎ去ります。」(ヨハネの手紙一 2:15-17)

私たちキリスト教徒が日々慰めを得ている良い知らせは、神の創造的な言葉がイエスという人物として人間の肉体を取り、神の統治による平和な王国のビジョンを新たに宣言し、それを現実にするための道を私たち人間に示していることです。これが今日、私たちの姉妹クレアが喜んでいる良い知らせです！

イエスは悪の支配の誤った価値観に意図的に反対する生活様式を選択し、さらに、聖霊を通して、利己的ではなく自己犠牲の模範に従うよう私たちに力を与えました。クレアは、イエスが約束する王国における人生の充足への逆説的な道を見てきたことを喜んでいますが、フランシスコもそのビジョンを実現するためにその道を歩きました。それはパウロが私たちに勧めている道です。「キリスト・イエスにあるのと同じ思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。キリストは神の御姿でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえってご自身を無にして、奴隷の姿をとり、人間と同じようになられました。そして、人の姿をとって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、しかも十字架の死にまで従われたのです」(フィリピ 2:5-8)。

この正反対の人生の計画は、所有物に対する私たちの態度に表れています。これはおそらく、ルカによる福音書に最もよく表れています。「イエスは弟子たちを見上げて言われた。『貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである。...しかし、富んでいる人々は、わざわいである。あなたがたはすでに慰めを受けているからである。』(ルカ 6:20、24)。ここでのイエスの言葉は、敬虔さと繁栄が一般的に結び付

けられている旧約聖書のほとんどの部分とはまったく対照的です。物質的な報酬は、神の律法を守ったことに対する期待された結果でした。申命記 6:3、11:13 以降、詩篇 112 を参照。「主を恐れ、その戒めを大いに喜ぶ人たちは幸いである。…彼らの家には富と財産がある！」義人は強い息子、美しい娘、そして満杯の穀倉を期待できた。今日でも、この「成功の福音」がプロテスタントの「福音主義」説教者によって繰り返されるのを耳にする。

しかし、預言者たちは、世俗的な成功は神の恩寵の必然的な兆候であるという考えに異議を唱え始めた。裕福で権力のある人々は、彼らのメッセージに最も心を閉ざす人々であることが多い。しかし、ユダヤ教が物質的な繁栄は必ずしも信心深さと結びつかないという感覚を育み始めたのは、流刑後になってからだった。神の法に献身する人がこの世の「小さな者」の中にいることに気づくのは、おそらく典型的でさえある。実際、これらのアナウイムの一部の間では、義人はこの世で繁栄することを期待できないという確信が生まれ、特にこの現世がサタンの支配下にあることを経験するようになった。神が統治を確立する来たるべき時代にのみ、神の僕たちは報いを受ける。

イエスの説教は、ルカによる福音書の上の祝福に見られるように、私たちがどこかで満足を得たいかを選ばなければならないという確信を表現しています。それは、「今ここ」か、来たるべき神の王国かです。金持ちと貧しいラザ口のたとえ話（ルカ 16:19-31）は、来世では運命が逆転すると述べています。「思い出しなさい。あなたは生きている間に良いものを受け、ラザ口は同じように悪いものをもらった。しかし、今はここで彼は慰められ、あなたは苦しんでいるのです。」マリア自身も神の裁きを喜んでいま

す。「神は飢えた人を良いもので満たし、富める者を空腹のまま去らせた」(ルカ 1:53)。なぜでしょうか。金持ちになると、人々は人生のどんな変化にも抵抗するようになるようです。私たちは現状維持に満足し、神が提供している良いものを切望するのではなく、自分のやり方で物事を進めます。それが富の最も陰險な影響です。裕福であれば、今のままで十分です。変化は、別の種類の人生を楽しむ機会ではなく、脅威になります。

両方の宴会で食事をすることは、おそらく許されないでしょう。なぜでしょうか。ユダヤ教の聖書の偉大な価値観の観点からイエスを見ると、イエスは神の善なる創造を感謝して受け入れること、貧しい人々や抑圧された人々への思いやり、不正に対する預言的な抵抗を説いていることがわかります。この観点から、イエスが物質的な財産について語ったときの主な関心は、私たちが所有する良いものが、彼が第二の偉大な戒律と呼ぶもの、つまり隣人を自分自身のように愛するように努めること (マタイ 22:39) を私たちが達成するのに役立つことを強調することだったでしょう。イエスは確かにこれを行いました。しかし、イエスは「最も重要な第一の戒律」(マタイ 22:38) の実践、つまりすべてのものを超えた神の絶対的で完全な愛のために物質的な財産が果たす役割についても同様に関心を持っていました。イエスは、富が人間の心を歪め、神との関係を破壊してしまう可能性があることを痛感していました。これは、次の原則に最も明確に述べられています。「だれも二人の主人に仕えることはできません。奴隷は一方を憎んで他方を愛し、一方に親しんで他方を侮るからです。神と富とに仕えることはできません」(ルカ 16:13)。「富」という言葉は、富を神として擬人化しています。お金

は、善悪を問わず人間の目的を達成するための、道徳的に中立な手段ではありません。富は、人間の心を奪う神の競争相手です。神への献身を妥協することなく、どれほどの世俗的な成功を達成できるでしょうか。(ここで、私たちはお金に対するフランシスコの激しい反応を思い浮かべます！)

イエスと金持ちの支配者との出会い(ルカ 18:18-30)は、この競争を例証しています。この男は、最初は自分の富が神への欲求に取って代わることを許していないように見えます。彼はイエスに、「良き先生よ、永遠の命を受け継ぐためには、何をしなければなりませんか」と尋ねることから始めます。イエスは答えとして、隣人愛に関する戒めを要約します。「私は若い時から、これらすべてを守ってきました」と支配者は答え、イエスはその言葉を受け入れます。それでも、イエスは富がこの男に及ぼしている内面的な腐敗効果を見抜いています。そこで、その有害な影響を終わらせる方法を彼に示します。「欠けているものが一つあります。あなたの持ち物を全部売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになります。それから、私に従ってきなさい。」神への最も深い欲求を持つ人は、神の子との毎日の個人的な親密さへの招待に間違いなく飛びつくでしょう。しかし、金持ちの支配者にとっては遅すぎます。彼の富への愛は、すでに神への愛を超えています。「彼は非常に裕福であったので、悲しくなった。」イエスはこれらの兆候に気づき、「富んでいる者が神の国に入るのはなんと難しいことか。富んでいる者が神の国に入るよりは、ラクダが針の穴を通る方がもっと易しい」とおっしゃいます。

これは、神への忠誠と物質的な祝福に関する伝統的なユダヤの教えに対する非常に過激な挑戦であり、弟子たちは「それでは、だれが救われるのでしょうか」と尋ねます(ルカ 18:26-27)。「人間には不可能なことでも、神には可能です」とイエスはおっしゃいます。お金が持ち主の心を縛るのを解くには、神の奇跡のようなものが必要です。なぜなら、富は私たちが所有するものではなく、私たちが所有するものだからです。人は偶然に裕福になることはありません。たくさんのお金を稼ぐために費やす時間と努力、金銭的利益の追求に集中すると他人の要求に無関心になる、そしてそのような富を得ることでほぼ必然的に生じる不正は、イエスが示唆するように、人の人生において神の代わりになる、非常に大きな関心事です。

ルカによる福音書の別の箇所でも、イエスはそのような奇跡がどのように起こるかを示唆しています。「あなたがたに言う。悪の富を友として自分のために作りなさい。そうすれば、富がなくなったとき、永遠の住まいにあなたがたを迎え入れてくれるだろう」(ルカ 16:9)。ここで私たちは、この世の富が危険ではあるものの、人々がその富を自分より劣る兄弟姉妹と分かち合い、皆が属する共同体を作るのに役立つなら、神の国にまだ役立つかもしれないということが分かります。後のユダヤの伝統では、施しが和解と許しをもたらすという洞察がすでにありました。「黄金を蓄えるよりは、施しをする方がよい。施しは死から救い、すべての罪をきよめてくれるからである」(テバ 12:9)。そしてイエスは私たちにこう告げています。「自分の持ち物を売って施しをしなさい。自分のために、古びない財布を作り、天に尽きることのない宝としなさい」(

ルカ 12:33)。すでに見たように、イエスは既に金持ちの支配者に同様の助言を与えていました。

この教えは、使徒行伝でルカが初期のキリスト教共同体を描写している場面で実践されています。人々は財産を売り、分配のためにそれを手渡しました (使徒行伝 2:44-47、4:32-35)。そのため、「彼らの中には困っている人は一人もいませんでした。」ここで、旧約聖書で強調されていた正義は、新しい神の民の理想に取り入れられています。イスラエルは血縁の共同体であり、したがって、そのすべての構成員を気遣うことは正義における明らかな義務でした。新しいキリスト教共同体は、特に「汚れた」異邦人をすぐに自分たちの組織に組み入れたため、自然な方法で結びついていたわけではありません。彼らを結び付けていたのは、十字架につけられ、復活し、彼らの中にいるイエスを信じる信仰だけでした。誰も排除されたり、疎外されたり、よそ者とみなされたりしてはなりません。この新しい神の民は、そのすべての構成員が進んで謙虚になった場合にのみ平等を達成できるでしょう。イエスの弟子たちは「最も低い所」(ルカ 14:10) を求め、「すべての人に仕える者」となることを求め、イエス自身の模範に従うべきでした (ルカ 22:24-27 参照)。

初期の教会は大きな組織ではありませんでした。一部の学者は、100 年までに世界に 8 千人から 1 万人のキリスト教徒がおり、人々が兄弟姉妹として互いに個人的に知り合うようになった地元の家庭教会のネットワークを構成していたと推定しています。しかし、地元の会衆が大きくなっても、キリストの体の中で裕福なメンバーは、その富を困っているメンバーと分かち合う義務があるという確信は常に残っていました。1 世

紀初頭のローマの預言者ヘルマスの洞察は、何十年にもわたって繰り返されました。「富める者の救いは、貧しい者の祈りである」。十分な資産を持つ裕福なキリスト教徒は、主に彼らの寛大さの受益者であるキリストの友人たちの感謝の祈りを通して、神の国に入ることができると確信していました。

フランシスコとクララの物語についてのあなたの知識から、この考察が、初期のフランシスコ会の男性と女性が彼らの生き方を急進的な福音の価値観の回復と見なしていたことを理解するのに役立つことを願っています。4世紀に起こった大規模な文化的、社会的変化により、教会内ではそれらの価値観の一部が影を潜めていました。コンスタンティヌス帝の治世中、教会は、自分たちをより大きな「世界」の代替物とみなす迫害された真の信者の一派から、社会自体の公式の確立された宗教へと変貌し始めました。そのより大きな世界の価値観、特に地位、快楽、物質的利益への欲求が教会の指導者にまで浸透し始めると、熱心な男女が抗議し、文字通り社会から「脱落」し、世俗の生活(そして世俗的な教会!)から撤退しました。これを私たちは修道運動と呼んでいます。その後、中世には、西洋社会が封建制度の中で階層化され、多くの修道院自体が富と権力のウイルスに感染しました。これにより、一部の修道改革者や、フランシスコやクララのような一般の先見者たちが、福音の急進的な価値観を取り戻す新しい運動を開始しました。

現在フランシスコ会運動と呼ばれているもの自体も、物質的貧困という点では多種多様な表現方法を持っていました。フランシスコとその兄弟、クララとその姉妹たちは、財産所有やあらゆる種類の富を全面的に拒否し、自らの手で働き、他の貧しい人々

と同様に、支援者に頼って生活していました。一方、「悔悛修道会」として知られるようになったフランシスコ会の精神に感化されて集まった多様な一般信徒グループは、通常通りの職業を維持し、物質的財産の規律ある使用と恵まれない人々への慈悲深い連帯を通じて神への回心を表現することを選択しました。今日、あなた方王たるキリストの権宣教師は彼らの子孫です。

あなたは、自分の決意を次のように表現しています。「清貧の約束をもって、宣教師は聖フランシスコと聖クララの例に倣い、貧しいキリストに倣って生きることを約束します。宣教師は、喜びをもって自分の被造物であることを受け入れ、神への完全な信頼をもって、神の父性と母性の摂理に身を委ね、人間としての安全を求めたり、地上に宝物を蓄えようとしたりはしません。宣教師は、所有するものの所有権と使用权を保持しながら、神に属する財産の管理者であると自らをみなします」(憲章、第18条)。これらの言葉は、物質的所有物に対するフランシスコ会の美しい見解をはっきりと表現しています。イタリアの修道院生活を送るクララ会、コンゴで牧会活動を行う修道士、米国の看護師である宣教師に共通するものは何でしょうか。彼らはフランシスコ会生活の表現が非常に異なりますが、この世の善いものに対する独特の共通のビジョンを共有しています。

そのビジョンの手がかりは、フランシスコが清貧の誓願を描写する方法に示されています。「小兄弟の規則と生活はこれです。従順に、自分のものを持たずに、貞潔に生きることによって、私たちの主イエス・キリストの聖なる福音を守ることです」(RB 1.1)。イエスに従うことを誓うなら、私たちは何をしなければなりませんか？彼は(

このプレゼンテーションの冒頭で引用した引用で) 私たちにこう言っています。「すべての善を主に委ね、すべての善は主のものであることを認めましょう。... 唯一の善である主に、すべての善は属します。」すべての善が神のものであるなら、どうして私は何かを「私のもの」と言うことができるのでしょうか? フランシスコによると、罪とは、神のみに属するこの世の良いものを私たちが自分のものにする事(「私のものである」と主張すること)です。

実際、フランシスコは(訓戒2)、自己占有が原罪であると主張しています。フランシスコは、アダムとイブが食べることを禁じられていたエデンの園の一本の木についてコメントしていますが、サタンは彼らを誘惑します。「いいえ、神はあなたがそれを食べると神のようになることを知っているのです。」そして彼らは自分で神になろうと試み、それを食べました。私たちの最初の両親のこの原始的な行為はすべての罪の典型であるとフランシスコは言います。「自分の意志を自分のものにすることによって」人は善の知識の木を悪の知識の果実に変えます。OFMのロバート・カリス兄弟は次のように説明しています。「善なる神は私たちに贈り物を降り注いでくれます。私たちが神の素晴らしい自由意志の贈り物を通して、まるで自分のものであるかのようにそれらを喜ぶとき、私たちはそれらを罪の対象に変えます。」

私たち人間は、地球上の良いものを自分のために蓄積したいという願望から、最終的に所有できないものにしがみつこうとします。そのため、私たちは所有物を失う方法を苦痛を伴って学ばなければなりません。神の賜物の豊かさを体験するために所有物を手放すことは、すべてのものに対する私たちの態度を改めさせ、幸せとは何かを見出

します (これはクララの「聖なる交換」に対する賞賛です)。ローマの哲学者セネカの時代から、世俗の知恵でさえ、人を幸せにする方法は2つしかないと言っています。所有物を増やすか、欲望を減らすかです。私たちは、もっともっと (消費主義、貪欲、嫉妬) を求めるか、貪欲さを改め、必要なものだけ、つまり神という善を求めます。

「貧しさ、最も深い知恵よ、あなたは何にも奴隷ではなく、無執着ですべてのものを所有している」(トーデイのヤコポネ)。イエスの言葉を聞きましょう。「恐れることはない、小さな群れよ。あなたがたに王国を与えることは、あなたがたの父の喜びであるからだ! (ルカ 12:32)。

ドミニク・V・モンテイ、OFM